

# 『菅家文草』卷三注釈稿(六)

佐藤 信一

※今回から「白氏文集」、「元氏長慶集」に花房英樹氏「白氏文集の批判的研究」(昭和三五年三月、桑文堂刊)、同氏「元稹研究」(昭和五二年三月、桑文堂刊)によって、詩番号を振ることにした。

校異に用いた略号を確認しておく。

## 【略号】

- 〈内A〉…内閣文庫A本(底本)
- 〈川口〉…川口久雄氏旧蔵本
- 〈内B〉…内閣文庫B本
- 〈尊A〉…尊経閣文庫A本
- 〈尊B〉…尊経閣文庫B本
- 〈尊C〉…尊経閣文庫C本
- 〈尊D〉…尊経閣文庫D本
- 〈蓬左〉…蓬左文庫蔵本
- 〈別雷〉…賀茂別雷神神社蔵本
- 〈道A〉…道明寺天満宮蔵A本
- 〈多A〉…多和文庫A本

- 〈多B〉…多和文庫B本
- 〈東A〉…東大所蔵A本
- 〈東B〉…東大所蔵B本
- 〈京A〉…京大所蔵A本
- 〈京B〉…京大所蔵B本
- 〈陽明〉…陽明文庫蔵本
- 〈資A〉…京都府立総合資料館蔵A本
- 〈資B〉…京都府立総合資料館蔵B本

## 【本文・訓読】

193 新月二十韻(新月二十韻)

- 百城秋至後 ひやくじゆうしゅうきりてのち
- 三諫月成初 さんかんげつなるはつめ
- 碧落煙氣盡 せきらくえんきじんく
- 黄昏晝漏餘 あせまる
- 退<sub>レ</sub>衙西顧立 ををを退きて西を顧みて立つ
- 尋<sub>レ</sub>寺上方居 寺を尋ねて上方に居り
- 玉縷風頭畫 玉縷風頭の畫

銀泥日脚書

跛將心緒急

忘却眼珠除

仰有<sup>ニ</sup>織々看<sup>ニ</sup>

行無<sup>ニ</sup>皎々舒

插<sup>レ</sup>雲鷺<sup>ニ</sup>度鴈

投<sup>レ</sup>水誤<sup>ニ</sup>遊魚

風腦光相似

蛾眉細不<sup>レ</sup>如

藏應<sup>レ</sup>容<sup>ニ</sup>掌握

動欲<sup>レ</sup>任<sup>ニ</sup>吹嘘

少婦看珍重

詞人旣忽諸

推量<sup>ニ</sup>莫影薄

想像<sup>ニ</sup>桂枝疎

庚令登<sup>レ</sup>樓嬾

王生命<sup>レ</sup>駕徐

浪花晴<sup>ニ</sup>鳴嶼

露葉映<sup>ニ</sup>芙蓉

旅客愁而已

詩情樂只且

照勝<sup>ニ</sup>冬雪讀

明助<sup>ニ</sup>夜潮漁

屬<sup>レ</sup>思江舟棹

宜<sup>レ</sup>瞻野草廬

銀泥日脚の書

跛<sup>つまた</sup>は將<sup>もち</sup>て心緒急なり

忘却しては眼珠除ふ

仰げば織々たる看有れども

行きて皎々として舒ぶること無し

雲を插みては度る鴈を驚かす

水に投りては遊げる魚かと誤つ

風腦光相似たり

蛾眉細くして如かず

藏へて應に掌握に容れむとす

動きて吹嘘に任せんと欲す

少婦は見て珍重すれども

詞人は旣びて忽<sup>いんか</sup>諸にす

推量す莫影の薄きことを

想像す桂枝の疎なることを

庚令樓に登るに嬾し

王生駕を命すること徐<sup>ま</sup>からむ

浪花鳴嶼晴れ

露葉芙蓉に映ず

旅客愁ふらくのみ

詩情樂しびかくばかり

照らすときは冬の雪の讀みに勝れり

明るきときは夜の潮の漁りを助く

思ひを屬く江舟の棹

瞻るに宜し野草の廬

平沙閑點檢

曲浦獨蹢躅

觸<sup>レ</sup>事高乘<sup>レ</sup>興

馳<sup>レ</sup>神半歩<sup>レ</sup>虚

了知<sup>ニ</sup>新蚌蛤

那見<sup>ニ</sup>老蟾蜍

若使<sup>ニ</sup>虧盈易

催廻<sup>ニ</sup>五馬車

平沙閑なるままに點檢す

曲浦獨り蹢躅たるのみ

事に觸れては高く興に乗ず

神を馳せては半ば虚を歩む

了り知る蚌蛤新なりといふことを

那んぞ見む蟾蜍老いぬといふことを

若し虧盈を易からしめば

催し廻らさまし五馬の車

※「畫」：底本「盡」、《別雷》注記、《多B》《京A》《陽明》ニヨリ改ム。※「看」：底本「著」、《多A》ニヨリ改ム。※

「握」：異体字注記アリ。※「想」：底本「相」、《内B》《尊

A》《尊B》《尊C》《尊D》《蓬左》《別雷》《道A》《多A》《多

B》《東A》《東B》《京B》ニヨリ改ム。※「乘」：底本「乘

ヲ見セ消ナシテ右傍ニ「棄」ト改ム。

【校異】

氣：氣〔右傍ニ「氣イ」ト注記ス〕《別雷》、氣《多A》。盡：

書《蓬左》。黃昏畫：三字脱〔「・」トシテ右傍ニ「黃昏畫」ト

注記ス〕《別雷》《多A》。畫：書《尊D》《蓬左》、盡《道A》。

衛：衛〔右傍ニ「衛」ト注記ス〕《尊C》。方：一字脱《蓬左》。

玉：玉《多A》。畫：盡《内B》《尊A》《尊B》《道A》《多

A》、書《蓬左》、盡〔右傍ニ「畫イ」ト注記ス〕《別雷》。忘：

忌《尊B》《資A》《資B》《尊C》《道A》《多A》《東B》《京

A》《京B》《陽明》、忌〔右傍ニ「忘」ト注記ス〕《別雷》。眼

：服《蓬左》。仰：仰〔異体字注記アリ〕《別雷》。織：織〔異

体字注記アリ〕《別雷》。看：着《内B》《尊A》《尊B》《尊C》





文集」卷一二「長恨歌」(〇五九六)に「上窮碧落下黃泉、兩處茫茫皆不見」とある。道真自身の初期の作、卷一、四番詩「賦得赤虹篇」に「初疑碧落留飛電、漸誤炎洲颺暴風」とあったのも想起される。

◇煙氣：ものを燃やす時に生じる煙のことをいう。漢王充「論衡」卷一五「順鼓」「尚書太傅曰、煙氣郊社不修、山川不祝、風雨不時、霜雪不降」とあり、杜甫「白水懸崖少府十九翁高齋」「煙氛霧崑崙、煙麴森慘戚」とある。また「氛」は、元稹「月三十韻」(二九五)に「氛埃誰定滅、蟾兔杳難希」とある。

◇晝漏：昼間の時間のことをいう。元稹、「春六十韻」(〇二九四)に「晝漏頻加箭、宵暉欲半弓」とある。対を成す句の「半弓」が半月の喩となっている用例である。

◇退衙：役所から退出すること。白居易「白氏文集」卷五八「晚歸早出」(二九〇二)「退衙歸逼夜、拜表出侵晨」とある。

◇西顧：西方を振り返って見ることをいう。「詩經」「大雅文王」「皇矣」「乃眷西顧、此誰與宅」とある。その毛傳には「：顧、顧西土也。：」とある。「文選」卷一班固、「西都賦」に「乃眷西顧、寔惟作京」とある。魏武帝「與鍾繇書」には「朝廷無西顧之憂、足下之勲也」とあり「憂」とあることから、気がかりなことを含む物であろう。

◇上方：山寺のことをいう。韋應物「上方僧詩」に「見月出東山、上方高處禪」とある。詩題には、川口氏の指摘する「白氏文集」卷一四、「和錢員外青龍寺上方望舊山」(〇七四〇)な

ど多数がある。

◇玉縷：玉を繋ぐ糸、糸筋の意であろう。月光の喩となっているものであろう。ただし、用例未見。

◇風頭：風の吹くところ。岑參の「走馬川行奉送出師西征詩」に「風頭如刀面如割、馬毛帶雪汗氣蒸」とある。

◇銀泥：銀色の絵の具のこと。白居易「白氏文集」卷五四、「武丘寺路宴、留別諸妓」(二四九八)に「銀泥裾映錦障泥、畫舸停橈馬簇蹄」と、唐李賀「月漉漉篇」に「挽菱隔歌袖、綠刺宵銀泥」とある。

◇日脚：日の進む早さの意。転じて、余光の意でも用いるか。

岑參「送李司諫歸京詩」に「雨過風頭黑、雲開日脚黃」とある。また「和漢明詠集」下「水付漁父」平佐幹「日脚波平孤鷗暮、風頭岸遠客帆寒」は「風頭」と対をなす例である。

◇跛將：「跛」で爪立つの意。「史記」「韓王信傳」に「項王王諸將近地。而王獨遠居此。此左遷也。士卒皆山東人。跛而望歸」とあり、それへの「史記評林」の注に「索隱曰、跛音企、起踵也」とある。なお「將」は、荻生徂徠「訓譯示蒙」に「將ノ字ハ俗語ニ用フル字ナリ以ノ字ニ似タリ」とあり、岡田龍洲「助辭譯通」に「將ノ字。モツテト讀ム俗語ナリ故ニ詩詞ニ多ク用ユ」とあるように、助辭である。

◇心緒急：「心緒」は心の動きのきつかけ。意向。「白氏文集」卷一六の「百花亭晚望夜歸」(〇九九九)に「鬢毛遇病雙如雪、心緒逢秋一似灰」とある。

◇忘却：忘れてしまう。忘れる。「白氏文集」卷二〇の「贈蘇鍊師」(一三六三)に「攜將道士通宵語、忘却花時盡日眠」と

あるのは「搦將」と対になった例。

◇眼珠：目玉の意。「廣雅」釋親に「目謂之眼珠、子謂之眸」とある。道真はこの語を卷五、三五七番詩「左金吾相公、於宣風坊臨水亭、餞別與州刺史、同賦親字」で「恩紆難逃寒命駕、眼珠易落暗沾巾」と用いている。

◇織織：かほそい、か弱い意。月の形容によく用いられる語。鮑照「甌月城西門解中一首」に「始出西南樓、織織如玉鈎」、盧照鄰「長安古意」「片片行雲著蟬蟬、織織初月上鶉黃」とある。

◇皎皎：明るい意。この語も月の形容によく用いられる。潘岳「悼亡詩」に「皎皎窗中月、照我室南端」と、張若虛「春江花月夜詩」に「江天一色無纖塵、皎皎空中孤月輪」とある。◇插雲：用例として、『白氏文集』卷二の「和思歸樂詩」(〇一〇一)に、「漢水照天碧、楚山插雲青」とある。

◇驚：月が弓に見立てられて雁を驚かすという例は、六朝梁、庾肩吾「九日侍宴樂遊苑應令詩」に「騰疑疑矯箭、驚雁避虛弓」とある。また、元稹「月三十韻」(二九五)に「涼魄潭空洞、虛弓雁畏威」とある。菅原文時「織月賦」にも「旅鷹驚虛弓於紫烟」とある。

◇度鴈：空を渡って旅をする雁。白居易「白氏文集」卷一三「早春獨遊曲江」(〇六六六)に「影遲新度鴈、聲澀欲啼鴈」とある。

◇投水：水中に入れる意。『文選』卷五三、李康の「運命論一首」に、「如以石投水、莫之逆也」とある。「投」は観智院本「類聚名義抄」に「トル、トラフ、カラム、ホシマ、イタ

ル、ノコフ、ト、ノフ」といった訓を見る。「イタル」を採る。川口氏は、この句の表現の参考になる表現として、梁簡文帝「十空詩六首」(二)「水月」「溶溶如積璧、的的如沈鈎」を指摘する。

◇遊魚：水中に泳いでいる魚の意。『文選』卷一七、陸機「文賦」に「遊魚銜鈎、而出重淵之深」とあり、また『文選』卷二六に載せる潘岳「河陽縣作詩二首」(二二)に「歸鴈映蘭時、游魚動圓波」とある。菅原文時「織月賦」にも「遊魚疑沈鈎於碧浪」とある。

◇風腦：川口氏の指摘によれば「海内十洲記」「炎洲在南海中、地方二千里、去北岸九萬里、上有風生獸、似豹、青色、大如狸、張網取之、取其腦、和菊花服之、盡十斤、得五百年」とある「風生獸」の「腦」に拠ったもの。長寿を得る仙薬のこと。

◇相似：二つのものが類似する意。劉廷芝の「代悲白頭翁」と「年年歲歲花相似、歲歲年年人不回」は春の例。

◇蛾眉：美人の眉、転じて三日月の意。『文選』卷三〇、鮑照の「甌月城西門解中一首」に「未映東北墀、娟娟如蛾眉」(李善注「毛詩曰螭首蛾眉」、蛾眉蔽珠櫳、玉鈎隔瑣窓」とある。この「娟娟如蛾眉」は既に川口氏の指摘するところである。また唐王涯の「秋思贈遠」に「不見御書傳雁足、唯看新月吐蛾眉」とあるのは「新月」と用いられた例である。

◇不知：「しからず」と読む。及ばない意。岑參「石犀詩」に「始知李太守、伯禹亦不如」とある。

◇藏：観智院本「類聚名義抄」に「カクル、ヲサム、ツ、ム、

夕、ヨシ、クラ、トラフ」の訓を見る。「トラフ」を採る。

◇掌握：一握りの掌の中に「新月」がすっぽり入る意であろう。共通する発想のものとして、「文選」卷三〇、陸機「擬古詩十二首」「擬明月何皎皎」に、「照之有餘暉、攬之不盈手」が挙げられる。

◇吹嘘：息を、ふっと吹き出すこと。「白氏文集」卷五二、「和三月三十日四十韻」(二二五七)「寒景尚蒼茫、和風已吹嘘」は、春の用例。

◇少婦：年若い妻のこと。李白「塞下曲」に「玉關殊未入、少婦莫長嗟」とある。

◇詞人：詩文を作る人のこと。「文選」序に「詞人才子則名溢於繚……」とある。

◇忽諸：なおざりにする、ゆるがせにすること。杜甫「贈李八秘書別三十韻」に「勢藉兵須用、功無禮忽諸」とある。観智院本「類聚名義抄」に「忽諸イルカセ」とある。

◇萋影薄：萋の時に生えた莢という瑞草の故事に拠った叙述である。月の一日から十五日までは毎日葉が一枚ずつ生えて、十六日から晦日まで毎日一枚ずつ落葉したことから、新月の時は葉の影が薄いことを言う。「白虎通義」一八「封禪」「萋莢者、樹名也、月一日一莢生、十五日畢、至十六日、一去莢」とある。また、「文選」卷三、張衡「東京賦」に「蓋萋莢爲難蒔也、故曠世而不覩」と、また、卷二〇、應貞「晉武帝華林園集詩一首」に「嘉禾重穎、萋莢載芬」の李善注に「田俵子曰、堯爲天子、萋莢生于庭、爲帝成歷」とある。ただこの「田俵子」は逸書である。

◇桂枝疎：月桂の枝が疎らである。新月なので、月の表面がよく見えないことから言うか。「月」と「桂」が詠まれた例には、「藝文類聚」「天部上 月」に「梁簡文帝望月詩曰、桂花那不落、團扇與誰裝」とあるのは「那」と詠まれた例、また「梁庾肩吾和徐主簿望月詩曰、星流時入暉、又望月詩曰、桂殿月偏來、留光引上才」等とある。

◇庾令：庾亮、字は元規。「晉書」「庾亮傳」に「亮在武昌、諸佐吏殷浩之徒、乘秋夜往共登南樓、俄而不覺亮至。諸人將起避之、亮徐曰、諸君少住、老子於此處興復不淺、便據胡床、與浩等談詠竟坐」とある。ここからは「月」との脈絡は見えない。また、川口氏に拠れば唐謝觀「白賦」に「夜庾公が樓に登れば、月千里に明なり」とあるとのことなのだが、この「白賦」は「全唐文」(卷七五八)「全唐文補遺」(第一輯)に見えない。またこの叙述も謝觀の文章の何れにも見出せなかった。存疑。

◇王生：王徽之のこと。字は子猷。王羲之の子。「晉書」「王徽之傳」に「嘗居山陰、夜雪初霽、月色清明、四望皓然、獨酌酒、詠左思招隱、忽憶戴逵、逵時在剡、便夜乘小船詣之、經宿方至造門、不前而反」と、「月色」が「清朗」とされる。元稹「月三十韻」(二九五)に「荷鋤元亮息、回櫂子猷歸」とある。

◇徐：観智院本「類聚名義抄」に「ヤウヤク」、「ヲソシ」、「ヨウク」の訓を見る。「ヲソシ」を採る。

◇浪花：波を花に見立てた表現。「白氏文集」卷二〇「江樓晚眺、景物鮮奇、吟玩成篇、寄水部張員外」(一三七八)に

「白浪花千片。鴈點青天字一行」とある。なおこの表現は、道真にいくつも見られる。卷二、「水鷗」(一七二)に「飛疑<sub>二</sub>秋雪落<sub>一</sub>」、集談「浪花句」と、卷六、「海上春意」(四六七)に「染<sub>レ</sub>筆支願閑計會、山花遙向<sub>レ</sub>浪花開<sub>一</sub>」とある。

◇露葉<sub>レ</sub>露を帯びた葉のことをいう。「白氏文集」「酬<sub>二</sub>夢得暮秋晴夜對<sub>一</sub>月相憶」(三三八九)に「露葉團荒菊、風枝落病梨」とある。

◇芙蓉<sub>レ</sub>蓮、特に花の開いた蓮のこと。曹植の「洛神賦」に「迫<sub>レ</sub>而察<sub>レ</sub>之、灼若<sub>二</sub>芙蓉出<sub>一</sub>淥波<sub>一</sub>」とある。

◇樂只且<sub>レ</sub>「樂只且」は「詩經」「王風」「君子陽陽」に「右招我由<sub>レ</sub>房、其樂只且」、<sub>二</sub>「文選」卷二張衡「西京賦」に「盤干遊吹、其樂只且<sub>一</sub>とある。九条家本「文選」で「カクハカリナリ」としている。卷二四の嵇康「贈<sub>二</sub>秀才人入<sub>一</sub>軍五首(一)」に「盤干遊田、其樂只且」とある。「只且」は觀智院本「類聚名義抄」に「カクハカリ」「カクバカリ」二通りの訓を見る。「カクバカリ」とした。刊本である多和文庫B本・京大所蔵A本、B本に「カクハカリ」の訓がある。

◇冬雪讀<sub>レ</sub>晉、孫康の故事。冬は雪の光に照らして学問をしたという。「初学記」卷二「雪第二」「映書」として「宋齊語曰、孫康家貧、常映<sub>レ</sub>雪讀<sub>レ</sub>書、清淡交遊不<sub>レ</sub>雜」と、また「蒙求」に「孫康映<sub>レ</sub>雪、車胤聚<sub>レ</sub>螢」とあるのに拠つたもの。

◇夜潮<sub>レ</sub>夜間に満ちてくる潮。王昌齡「宿<sub>二</sub>京江口<sub>一</sub>期<sub>二</sub>劉春虛<sub>一</sub>不至」に「風静夜潮滿、城高寒氣昏」とある。

◇江舟棹<sub>レ</sub>先に引用した、「晉書」「王徽之傳」に「忽憶<sub>二</sub>戴逵<sub>一</sub>、遠時在<sub>レ</sub>剡、便夜乘<sub>二</sub>小船詣<sub>レ</sub>之、經<sub>二</sub>宿方至<sub>一</sub>造<sub>レ</sub>門、不<sub>レ</sub>前而

反<sub>レ</sub>」の「便夜乘<sub>二</sub>小船詣<sub>レ</sub>之」に基づくものであろう。

◇野草廬<sub>レ</sub>川口氏は諸葛孔明の草廬を帝が三顧した故事を指すかとする。「蜀書」卷五「諸葛亮傳」に、「<sub>レ</sub>先帝不<sub>レ</sub>以<sub>二</sub>臣畢鄙<sub>一</sub>、狼自枉屈<sub>二</sub>三顧<sub>一</sub>臣於草廬之中、諮<sub>二</sub>臣以<sub>一</sub>當世之事<sub>一</sub>」とある。

◇平沙<sub>レ</sub>广大で平坦な砂原のことをいう。岑參の「碛中作」に「今夜不<sub>レ</sub>知<sub>二</sub>何處宿<sub>一</sub>、平沙萬里絕<sub>二</sub>人煙<sub>一</sub>」とある。

◇曲浦<sub>レ</sub>曲がりくねった地形で浦になっているところのことをいう。王勃「遊<sub>二</sub>蓬池<sub>一</sub>序」に「平郊樹直、曲浦蓮肥」とある。

◇蹢躅<sub>レ</sub>ためらう。蹢躅に同じ。「後漢書」「仲長統傳」「以<sub>二</sub>奉<sub>レ</sub>之蹢<sub>一</sub>蹢畦苑、遊<sub>二</sub>戲平林<sub>一</sub>」とあり、李賢の注に「蹢躅猶<sub>二</sub>蹢蹢<sub>一</sub>也」とある。

◇乘興<sub>レ</sub>王子猷が山陰の月夜、興に乗じた故事の言葉。前に引用した「晉書」「王徽之傳」の続く場面に、「人問<sub>二</sub>其故<sub>一</sub>、徽之曰、本乘<sub>二</sub>興而來<sub>一</sub>、興盡而反、何必見<sub>二</sub>安道<sub>一</sub>」とある。

◇馳神<sub>レ</sub>「神」は觀智院本「類聚名義抄」に「カミ」、「オニ」、「タマシヒ」の訓を見る。「タマシヒ」を採る。

◇半歩虛<sub>レ</sub>道家の言葉。「歩虛」で、道士が空中を歩行することとをいう。李白「題<sub>二</sub>隨州紫陽先生壁<sub>一</sub>」に「喘息澹<sub>二</sub>妙氣<sub>一</sub>、歩虛吟<sub>二</sub>眞聲<sub>一</sub>」とある。

◇了知<sub>レ</sub>「了」は九条家本「文選」卷五九、王巾「頭陀寺碑文一首」「息心了<sub>二</sub>義<sub>一</sub>」の「了」に「サトリテ」とする。「サトリシル」と読んでおく。

◇新蚌蛤<sub>レ</sub>「蚌蛤」は、はまぐりのことをいう。「呂氏春秋」卷九「季秋紀」「精通」に「月羣陰之本、月望則蚌蛤實、羣陰



盈、月晦則蚌蛤虛、羣陰虧、夫月形于天、而羣陰化爲川」とある。なお「藝文類聚」卷一「天部上 月」も、同文を引く。

◇那見：「那」は九条家本「文選」卷二五、謝靈運「登臨海嶠初發 疆中 作與從弟惠連 見羊何共和之一首」一「還期那可尋」の「那」に「イツクソ」の訓を見る。また寛文版本にも同文があるが、そこでは「ナンソ」と訓じている。「イツクソ」と読んでおく。

◇老蟾蜍：「淮南子」卷七「精神訓」一「日中有踰鳥」、而月中有「蟾蜍」とある。ただ、「藝文類聚」卷一、天部上「月」には他にも「五經通義曰、月中有兔與蟾蜍何。月、陰也。蟾蜍、陽也。而與兔並明、陰係陽也」や「乾鑿度曰、月三日成魄、八日成光。蟾蜍體就、穴鼻始明」といった例も検索できる。

◇虧盈：欠けることと満ちること。「韓詩外傳」卷三に「夫天道虧盈而益謙、地道變盈而流謙」とある。ここでは、月の満ち欠けのことをいう。元稹「月三十韻」(〇二九五)に「今古雖云極、虧盈不易違」とある。

◇五馬車：五頭立ての馬車。普通の馬車は駟といって、四頭立てであった。太守の乗る車が五頭立てであった。漢の「樂府古辭」「陌上桑」に「使君從南來、五馬立時囑」とある。

【試訳】

193 新月二十韻

多くの城に秋が訪れて後

三たびいまして新月になりはじめた頃

青空に霞も消えてしまつて

黄昏になつてもまだ昼間の時刻であるのは新月がでているからなのであろう

役所から退庁して西方を振り返つて見てみる

寺を尋ねて来て奥の院にいる

玉を繋ぐ糸のような月光が風の吹くところの絵のようである

月光は銀泥で書いた日の光の余光のようである

足を爪立ちしては月が出るのを、今か今かと気が騒ぐ

新月は細いので出ていることを忘れては眼をぬぐっている

月を仰ぎ見るとかすかな光を見ることができなければならない

月の光が地上に届いても明るく伸びきつてしまうこともない

月は雲の隠れから見えて旅行く雁を驚かせる

新月が水に光を投じては、釣り針かとおよぐ魚を誤らせる

仙薬である風脳の光と新月の光はよく似ている

蛾眉のような三日月も細いことでは新月に及ばない

新月を捉えて手のひらの中に入つてしまつてしまおうとする

新月は細くほんの一息ふきかけただけでも動いてしまふ

である

年若い妻は月の変わり目を示す新月を見て珍重するけれども

詩人は満月ではないから遊びものにしてもいい加減にする

新月の明かりでは瑞草である蕙葉の葉の影はきつと薄いであろうと推量する

新月の中の桂の枝も疎らであらうことを想像する

満月ではないので、庾令も樓に登るうにも物憂い

同じ理由から王徽之も乗り物を命ずることがおそいであろう

花のように波が立ち島々は晴れわたっている。

露を帯びた葉が蓮の花に映じて咲いている

旅客である私も愁うるばかりなのである

詩情の楽しみはこれほどのものなのである

たとえ新月の光であっても照らすときには冬の夜の雪以上である

また明るいときは夜の漁を補助するものになろう

心を王徽之が乗ったとされる江洲の舟の棹に寄せてみる

新月が照らしてくれているので、茅葺きの小屋も見るのである

新月の下で平らな砂原を手持ちぶさたに任せて調べてみる

曲りくねった浦になっている所だただ一人ためらっているばかりである。

王子猷ではないが事に触れては高らかに興に乗じる

魂を馳せ向わせては半ば虚空を歩むようだ

はまぐりが月によつて新しく生まれ変わるということに納得する

月に住むひきがえるが老いてしまったということがどこに見られようか

もし月の満ち欠けを容易にさせたとしたならば

太守が乗るといふ五馬の車もうながされめぐつてくるであらう

### 【考察・一】

題詞の元稹「月三十韻」(〇二九五)との関係であるが、元

稹には、注釈にも挙げたとおり、「春六十韻」(〇二九四)等の作品もあるし、「代曲江老人百韻」(〇二六八)、「泛江甌月十二韻」(〇二七九)などと、この形式の作品が多く見られる。道真も、或いはここから着想を得たか。

### 【考察・二】

第十一句「仰有織々看」で「看」は底本「著」に作る。また校異にも示したとおり、大半の諸本は「著」である。「著」で、あるいはしるし、か弱いしるしの意かとも考えたが、適切な用例が検出できず、多和文庫A本の異文によつて校訂してしまつた。「官家文章」全体に関わる問題だが、本文の復元に後代の一本でもつて直してよいのかは、躊躇せざるを得ない。

### 【考察・三】

島田忠臣の「田氏家集」中「拜新月」は、題辭のみの類似であるが、孫の菅原文時「本朝文粹」「織月賦」には、類似する表現が二三見られた。今は、これら三者の表現を今回より微細に検討した上で、何か表現史のようなものが紡ぎ出せるのではないかと考えている。菅原一族が志向したあるべき表現のようなものが見て取れるのではないかと。そもそも「新月」とは、旧暦で月の初めに見える月のことである。つまりこれから望月に向かう可能性を持った月ということが出来よう。そこに道真は左遷という不遇な境涯を、抜け出す切っ掛けのようなものを見出そうとしたのではなかったか。「新月」ならば望月になるが、満月は翳りを増さざるを得ないのである。

(本学助教)